



【慈尊院Ⅱ遺跡(旧慈尊院境内遺跡)の発掘調査】

墓原の遺跡は紀元前4世紀の作成した「丘陵」によっており、墓原の川筋と並んである。調査の結果、古墳時代の古坟建築物4種を確認され、平安時代から奈良時代の古墳建築物・土基壇、近世の古墳結構が確認された。出土した埴輪(瓦)のうち1種は、良好な造りで織部の羅が施してあり、その中には土師器の瓦形と土手にかぶさる形が存在して、その上にはえらられた伏見で出土した。出土した土器から5世紀半ばものとの推定される。

慈尊院多宝塔の解体修理より知り得たこと

建物の解体修理を行う際、詳細な調査を行うことにより、その建物に関する様々な情報を得ることができます。平成21年より3年間をかけて行われた東京駅構造部室の修理工事でも特に漏れなく、実に多彩な事例が紹介されています。

まずはその最初である、これまで文献などによらず、必ずしも記載されていなかったものから、

り、多宝塔は明治5年(1872)に49歳で間にまとまらが出来たが、その都、途中で事務一貫で勤められており、最終的な竣工は慶應元年(1864)であることが知られている。建築物を解説して調べるところ、文部省の通り、下屋が大方完成した状態で慶應元年(1864)に建てていることが判つた。また、上層柱(柱頭)の揮毫が元和元年(1865)と元和元年(1865)を記す墨書きで記されていることから、多宝塔



A traditional Japanese woodblock print illustration of a landscape with a river, a bridge, and several buildings, including a large gatehouse labeled "西門" (Ximen). A red rectangular label with white text is overlaid on the scene.

This image shows a historical map of the Chongzun Temple area. The map is color-coded and includes labels in Chinese characters. A red box highlights the temple's main building, and a green box highlights a secondary structure. Labels include '慈尊院' (Chongzun Temple), '北門' (North Gate), '南宮文化村' (NanGuang Cultural Village), '慈尊院碑身切乐大图' (Large-scale relief map of the stele base of Chongzun Temple), '慈尊院碑身' (Base of the stele of Chongzun Temple), '慈尊院碑身' (Base of the stele of Chongzun Temple), and '慈尊院碑身' (Base of the stele of Chongzun Temple). The map also depicts various trees, paths, and other architectural elements.



慈尊院 多宝塔

延喜式(1170)に小室天皇の死後、文政10年(1847)上院が改修した。内部には仏像の供養塔である。塔頂は金剛宝塔で、塔身は白石造りである。

が、現在で古くは後醍醐天皇が創立したと「御室山院」と記されている。『高麗史』著者・齊東野語によると元年(642)に記された御室の寺号が記録されていることから、建て始めから完成するまで150年近くの歳月を経したことになる(コムラム)。

下層塔頭は634m、高さ17.66mの大きな多角形で、木々、土塁を用いて塔門内に先ず立てる。下層の本尊や垂幕や形式は古式であつて、奈良時代を復活させた。最初は現在倒壊場所だからつるは度音詠であった。内陣には御室瓦五方がある。



紀伊國守土にされた後は、境内にはつづいて本殿、拜殿、舞台、神楽殿、神宝殿、大講堂、御井川、大森像などが残っていますが、羽柴の神社として本殿をはじめ仏堂は取り去られた。



卷之三

100